



雨の多い季節となりました。すでに大型連休の前後で田植えが行われ、「玉苗植うる 夏は来ぬ」という感じです。空模様の様子もあり何となく閉塞感が漂うこの頃ですが、日々の生活を大切に思うことが先人の営みからも学べそうです。今号は古民家の特徴から、その辺りを考えてみたいと思います。

気候と歴史を映し出す古民家

市域に残る旧村の古民家や宿場の町家などの伝統的な日本家屋は、東アジア特有の気候とわが国の歴史文化を反映させています。その具体例を大間野町日中村家住宅の中に見てみたいと思います。

先祖は大間野の開拓者

当家の言い伝えでは戦国大名小西行長の家臣だったそうです。関ヶ原合戦(1600年)後に関東に下り、大間野の地に落ち着いて周囲を開拓したとのこと。当館の近くにある光福寺は中村家の菩提寺で、当寺と中村家の歴史を示す記録もあったそうですが、関東大震災(1923年)で失われてしまったようです。

江戸時代前半の中村家はいくつかの村からの年貢徴収・管理を行う『郷手代』という役割を担っていました。ところが幕府と村々の間にいる立場を利用して不当な利益を得ているとの疑いをかけられて、享保年間(18世紀中頃)、当主四郎兵衛は遠島になってしまいました。そうなるも本来なら闕所(土地の没収)となるのですが、代官の伊奈氏は温情を加えて一族の四郎左衛門の預かり地としました。その後、天保年間(19世紀前半)には中村家は大間野村の名主を務めるようになりました。この頃に整理された過去帳には、18世紀後半の当主四郎左衛門が“先祖”(初代)となっています。そこから数えて6代目の賢之輔(天保11年(1840)~大正5年(1916))について、7代目の貞次郎が建てた「賢之輔墓誌」には次のように記されています。

「賢之輔は幼名を亀之助といひ、父は四郎兵衛、母は田中氏。幕府時代には名主、王政維新の後には戸長、区長を務め学務委員を命じられた。また村会、県会の議員を務めた・・・・」

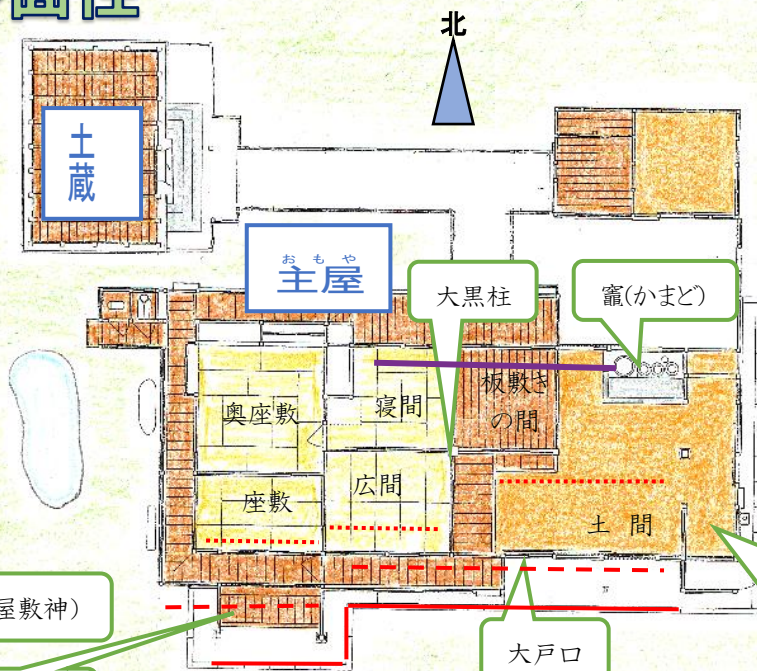
古民家の多面性

現在の中村家住宅の各建物は江戸時代のものではありません。全て明治以降のもので、けれども近世の様式を残しています。それらの中からいくつかお話ししましょう。

土蔵

明治27年(1894年)建設。床は主屋より1mほど高くなっています。これは水害の際に重要な物を守るためです。3~4尺(約90~120cm)ごとの柱を中にして、厚さ数十cmの壁になっています。火災から守る工夫です。

ある小学生は「シェルターだ」と表現しました。



かつてこの辺りに井戸がありました。

五右衛門風呂がありました。

日差しのライン

- = 夏至の正午
- - - = 春・秋分の日
- = 冬至の正午
- = 冬至の午後3時過ぎ

神々

庭の西には御嶽神社の祠があります。屋敷や土地全体の屋敷神(守護神)です。小さいながらも丁寧な彫刻を施した造りです。

主屋のあちらこちらに様々な神が祀られていて、その数は 20 余になります。中心になるのは広間の鴨居につけられた神棚で、神宮大麻(伊勢神宮)・氏神・各地域の神が祀られています。また他には竈(かまど)付近には竈神(荒神様)や廁(かわや)には廁神、大戸口には出入口の神です。そして多くの古民家に見られる大黒柱は大黒天を祀ったとされています。

これらの神々には家内安全(家族の健康、一家の繁栄、火災や盗難の防御、悪霊や病魔退散)や五穀豊穡(この地域では主として農業生産の向上)を願うものでした。これらは朝夕に、年中行事の際に、そして冠婚葬祭の際に祈りが捧げられた場所でした。

主屋(母屋)

明治末から5年ほどかけて大正3年(1914年)に完成したと伝えられています。それ以前の間取りを示す史料はありませんが、恐らくは似たものだったと推定されます。中村家は名主を務めた家ですから、その業務や領主の家臣(武士)を迎える玄関と部屋【**行政の場所**】、住人の普段の衣食住の場所【**居住の場所**】、また土間は炊事だけでなく農作業の一部も行われた部屋【**生産の場所**】といういろいろな機能がありました。

土間は“土の床の部屋”です。しかしそこにも様々な工夫があります。関東では荒木田土という粘土質の土を用いることが多かったようです。これにニガリと石灰を加えて練り、分厚い木の板で叩いて造る床です。そこでこの床を「三和土」といいます。ニガリは土を固め、石灰は消臭や殺菌の効果があるようです。



寄贈前の中村家(南側耕地から)

気候・季節そして歴史の中で営まれて来た

前ページの間取り図中にある赤と紫色のラインをご覧ください。これを見ると季節によって日差しの入り方が大きく異なることがわかります。この状況から季節による日差しを踏まえて屋根の張り出し方、軒の深さを計算していることがわかります。また軒の深さは建物の向きによっても異なります。

古民家の部材の多くは植物です。東アジアに属する日本は温暖湿潤気候で、実に多種多様の植物の植生が見られます。四季の区別が豊かで、4つどころか 24 もの季節があるとさえ言われます。(二十四節気)台風や降雪、水害、なども考慮したり、地形によっても建て方が異なります。豊かな種類の樹木の中から何をどの部分に用いるか、どのような道具でどのように加工するか、向きはどうするかということと共に、その時代の社会情勢や身分などによってなされてきたいろいろな工夫が、古民家の中に見出されます。

現存する古民家からは、かつての生活を検証することが出来ます。建物を末永く守っていこうとする考え方が表れています。そこには懐かしい過去の事だけではなく、現在や将来に生かせることが含まれていることでしょう。

近世町村の成り立ち

大間野町旧中村家来歴と大間野村のことを述べましたが、市域にあった他の旧町村はいつ頃どのようにして形成されてきたのでしょうか。このヒントとなる史料があります。町割り図と共に次のような記述があります。

(「瓜」は「越ヶ谷瓜の蔓」、「猫」は大沢猫の瓜の記述。この史料は文化年間(19世紀前半)に越ヶ谷宿本陣を務めた福井家の人が記録したものです。)

- ★権兵衛は中古に伊勢国から来て伊勢屋権兵衛と名乗って百姓になった。(瓜)
- ★百姓富田屋伊左衛門は元禄年間(17世紀末~18世紀初め)に近江から来た堀一族の本家である。(瓜)
- ★甚助は安永・明和年間(18世紀後半)に鎌倉から来たが、その後、小林村に引っ越した。(瓜)
- ★百姓伊右衛門は、中古、いずれから来たのか・・・(瓜)
- ★飴屋吉兵衛の先祖は延宝年間(17世紀後半)に大房村から大沢町に移ってきた。(猫)
- ★名主問屋を務めてきた江沢太郎兵衛は(家康が)関東に御入国になる前から大沢に住んでいる。(猫)

これ以外にもまだまだ多くの人々の出入りが見られます。安土桃山時代~江戸初期の変動期には、西の方から移ってきた人が多いように思います。上に紹介した中では伊勢(現三重県)、近江(現滋賀県)などからの移住です。この過程で身分上の変化もあったことでしょう。

中世まではこの辺りの中心は四町野(越ヶ谷本町~宮本1丁目・2丁目;迎聖院周辺)だったと思われます。奥州道は元荒川沿いに東町~大成町・相模町・瓦曾根~市役所西側から北へ延びていました。江戸に幕府が開かれてから日光道中の整備がされて、旧越ヶ谷町・大沢町に宿場が開かれ、次第に“町”が形成されました。